学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　近代日本の中国語教育関係書における擬声語の研究

申 請 者 氏 名　　李　夫　平

本研究は明治以降昭和 20 年までの近代日本の中国語教育の関係書における擬声語を研究の対象にし、その形態構造、意味分野、音声構成、音象徴の特徴から擬声語の実態を考察した。この研究は語群の語形、語義、音韻から、それらの擬声語の実態を究明することを通して、近代日本の中国語教育における擬声語を代表とする中国語の習得状況と近代日本人が持っていた中国語に対する認識状況を指摘した。

先行考察は、近代日本の中国語教育関係書の歴史的特徴（関係書の利用実態、当時の教育方法と目的に応じた特徴)、関係書の中の擬声語の位置づけ、日中の関係書の研究現状と中国語擬声語の先行研究を見た。この考察によって、近代日本の中国語関係書における擬声語の研究の可能性を提起した。それで、中国語関係書及びその中の擬声語（用例・語釈を含む）を取り出して詳細に検討する。

擬声語の音節パターンの特徴を型別及び各型の擬声語の分布状況からみると、中国語関係書にいて基本型とされる A 型、AA 型、AB (AB) 型の擬声語は常用されているのに対して、3 音節以上と特殊型の擬声語は少なく、使用度も高くない。児化擬声語は中国語関係書において頻繁に出現していた現象が目立っている。型別に対応する児化擬声語の分布状況の差異が存在している。例えば、常用型の A 型、AA 型、AB 型において多くあるのに対して、ABB 型、ABA 型、AABB 型、ABCB 型、ABCD 型、AAAB 型などの特殊型の擬声語には見られない。また、中国語関係書の擬声語は形態表の記符号の使い方において規範問題が存在している。つまり、中国語関係書の擬声語には、形態の規則性、語音形式の安定性と規範性を欠いた状況があった。この状況は擬声語の収集・記録方法、近代日本人学者の中国語の認識・習得の程度などと関わっている。さらに当時の中国語擬声語の実態を知るために、中国語の語音と意味の関わりをめぐって中国語擬声語の状況を検討する必要がある。

本論では中国語関係書の擬声語の意味分野を「人の声」、「動物の声」、「自然現象の音」、「動作に関わる音」、「物の音」(衝撃の音、破裂の音、摩擦の音、鳴る音の下位分類を含む) に分類した。意味分野別による中国語関係書の各型の擬声語の分布状況を見ると、動物の鳴き声と物の音は最も多い。すべての意味分野には、A 型、AA 型、AB（AB）型の擬声語は最も頻繁に見られるものである。AA 型と AAA 型は動物の鳴き声に最も多く用いられ、AB 型は物の音、AABB 型は人の声が多いというような対応関係も明瞭に見て取れる。つまり、意味分野に対応する各型の擬声語の分布状況によって、異なる型別の擬声語が持つ独自の音声描写の特徴がわかった。型別全体の擬声語の分布状況には、意味分野別によって擬声語の語数は大きな差が見られる。このように、意味分野の型別に対応する擬声語の分布状況によって、擬声語全体はバランスよく用いられていない傾向が見られる。『萬物聲音』と『北京語の味』を代表とする中国語関係書における擬声語の形態構造（型別の種類、各型の使用割合)、意味分野の種類、型別と意味分野との対応状況を現実の中国語擬声語の状況との対照を通して、『児女英雄伝』における擬声語と近代日本の中国語関係書における擬声語の音節パターンの使用自由度及び意味分野においての分布が比較的なコントラストを示していることが見られた。

中国語関係書の擬声語の音韻構成（声母・韻母・声）の検討で、破裂音（k を除く）と少数の破擦音（j・z・c）の声母、単韻母・-ng 韻母の韻母が最も頻繁に使われる音韻から見れば、中国語関係書の擬声語の音韻には、活発な音韻の組み合わせが少なく、現実の中国語と同様、中国語関係書の擬声語の声調には第 1 声が最も多く、非常に顕著な出現頻度

を持っている。音韻状況の考察結果として、中国語関係書における擬声語の実態は経済的・便利的な音韻特徴が容易に受け入れる中国語を呈する近代日本の中国語実用語の教育に応じているということである。
近代日本人の学者が持っていた中国語の言語音及びその意味に対する認識のもう一面を考察するために、擬声語の用例・語釈の意味特徴を分析することを通して、語頭音節の声母、韻母、声調の音象徴的な意味を詳細に検討してみた。それによって、破裂音と一部分の破裂音の声母と単韻母/ a，u，i/・複合韻母/ua/・鼻韻母などの常用された音韻の音象徴がはっきりと窺えた。また、一般的な音象徴的意味が中国語の音韻に見られる。例えば、対抗の運動状態或いは（力）強さのある運動のイメージが/b，p，d，t，g/の音象徴において、ある程度の一致性とされる。常用韻母の/a，u，ua，-ng/などは持つ大きさ・強さ及びそれらの対立のイメージが普遍的に見られる。このように、擬声語の声・韻・調の選択状況から見ると、それらの利用頻度のアンバランスと集中的な傾向が窺える。一方、自然音の特徴から見ると、それらの共通点が認識されやすく、言語音で表現されやすいのである。さらに、近代日本人（学者）が持っていた中国語擬声語に対する認識からいうと、中国語の言語要素の内部及び語音、語義などの間、習得差異が存在しているようであろう。
　まとめてみると、実際、中国語関係書の擬声語の形態構造、意味分野、音韻構成、音象徴の実態からみると、近代日本の中国語教育における中国語は語彙の範囲・広さ、語と音韻の認識の深度・全面性などの方面でまだ至っていないところがある。つまり、近代日本の中国語教育は一定の程度中国語実用語の習得に限らず、ある程度言語研究の努力もしていたのである。この考察の結果は中国語関係書の言葉の確実さ・真実さ、つまり、中国語関係書における語彙はどのようであるか、またそれらの資料は当時の北京語口語の実態を反映する面で、全面的であるかどうかという問題に対するある程度の解答となり得る。
　その原因というと、日中言語・文化の差異は中国語の習得、（近代）日本人が持っていた中国語に対する理解に困難を与えるに違いない。擬声語の一点に絞っていうと、一言語は子音・母音の組み合わせによって、複雑な音響も模倣できることは確かであるが、現実の音響と言語表現の対応特徴から見ると、民族間の根本的な感覚の相違はともかく、ある程度の隔たりが存在している。そして、異言語の教育・学習において、その隔たりを克服することは難しい。従って、異言語に対する全面的或いは系統的な認識をできるために、異文化に対する理解がどうしても必要である。

・
・
・

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 119 号	氏 名	李夫平
論文題目	近代日本の中国語教育関係書における擬声語の研究		

（論文審査概要）

本論文は、日本の近代(明治初めから第二次世界大戦終了まで)において編纂された中国語教育関係書を資料に、擬声語を収集し、その言語学的特徴を分析すると同時に、擬声語の研究からうかがえる近代日本における中国語観について分析を試みたものである。

論文の内容は次の通りに要約できる。

序章では、近年中国でも中国語史の資料として注目されるようになってきている「近代日本の中国語関係書」についてその研究上の価値を再確認するとともに、「中国語擬声語」について研究現状を述べ、言語研究者たちの擬声語への関心の低さや網羅的文献研究の不足など、存在する問題点を指摘している。

第１章では、研究対象たる近代日本の中国語関係書の概況を述べ、そのうち本論文が実際に資料として用いたところの、擬声語が収録されている書について、文献リストを提示した。

第２章では、中国語の擬声語に関する先行研究を参照しつつ、擬声語に現れるさまざまな語形を類型化した上で、近代日本の中国語関係書の範囲内での各類型の分布状況を統計し、A 型、AA 型、AB 型の三類型が多数を占めることを示した。

第３章では、擬声語を「意味分野」の観点から分析している。まず言語学における「意味分野」の概念について略述し、ついで擬声語の意味分野の分析について先行研究を吟味している。その上で、近代日本の中国語関係書の擬声語について意味分野ごとに統計し、A 型や AA 型が動物の声や動作に関わる擬声語に多いのに対し AB 型は物の音に関わる擬声語が多いなど、語形のタイプと意味分野との関係についても考察した。

第４章では、中国語関係書のうち擬声語の収録が特に多い『萬物聲音』『北京語の味』の二書を分析対象に選び、第３章での考察を更に深めている。また、この二書における擬声語の状況を清代の小説『児女英雄伝』と比較し、近代日本の中国語関係書の擬声語の意味分野及び語形タイプの選択傾向を浮かび上がらせようと試みている。

第５章では、中国語擬声語の音韻的構造に焦点を当て、近代日本の中国語関係書の擬声語にどのような子音・母音・声調がより頻繁に用いられるかを、擬声語の音節数(2 音節・3 音節・4 音節)ごとに整理している。その結果、比較的少数の音韻が突出して多く用いられることが見出されたが、論文ではこれを近代日本の中国語教育の実用性・簡便性の特質によって説明する。

第６章では、擬声語の音象徴の問題を扱った。音象徴に対する一般言語学及び中国語学領域での研究状況を踏まえて、中国語の子音・母音・声調とそれを含む擬声語の意味特徴との関連性について、中国語関連書からの用例を挙げつつ一つ一つ検証した。

終章は、各章の要約・結論・研究展望である。その「結論」において、論文の筆者は、近代日本の中国語関係書に収録された擬声語は音型パタンや意味分野等の分布において偏り(ずれ)を見せ、現実の中国語を必ずしも公平に反映してはいないこと、そしてそれは近代日本の中国語教育の実用的目的の表れであることを示唆した。

審査委員会は、上論文につき審査した結果、次の評価を与えることとした。

1．創造性の点については、達成できている。
日本近代の中国語学書は非常に多くあるが、中国語学の観点からこれを資料とした研究がなされるようになったのは日中ともに比較的最近のことである。本論文では、まだまだ研究途上であると言える上記資料をかなり網羅的に調査し、更にこれも先行研究の多くない「擬声語」というテーマから分析を加えた点に創意があり、新規性の点では評価できる。一方で、論文筆者が各章で解明しようとした中国語擬声語の形態類型と意味分野との関係性、中国語擬声語の意味と音象徴との関係性、及び擬声語の観点から見た日本近代の中国語教育の特徴などの諸点については、必ずしも皆を納得させる形で成果が表現しきれていない部分も見受けられる。

2．論理性の点については、達成できている。
個々の文章表現についてみれば、日本語表現に文法ミスや冗長さが見られ、また文脈を追うのが困難な個所があるなど、全体に読みにくいことが指摘できるが、論文全体の構造を巨視的に見た場合、擬声語の音形パタン及びその使用頻度を明らかにし、意味分野の分類を確定し、擬声語に常用される音素を指摘し音象徴の考察へと入ってゆく論証手順はむしろ周到であると言え、決して没論理であるとまでは言えない。

3．厳格性の点については、優れている。
本論文の特質の一つは、数多くの中国語関係書から擬声語を抽出して膨大な表にまとめて附録につけている点である。この部分は資料的価値が高く、本文中の統計的分析や用例の検討のしっかりした土台になっている。また、先行研究の渉猟も徹底しており、研究手法を満足できる水準とするのに貢献している。

4．発展性の点については、優れている。
本論文は第6章で、言語学的に正面から取り組むのが難しい音象徴の問題に意欲的に取り組んでいる。分析方法には未熟で主観的な面も多々あるが、擬声語を研究する上で、音象徴の問題は避けて通ることができない。今後の研究の進展が期待されるところである。

以上から、全体的に、達成できている。

論文審査結果
合・否

審査委員　（氏 名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ ㊞

（氏 名）富平美波

（氏 名）和田　学

（氏 名）更科慎一

（氏 名）森野正弘